

[シンポジウム I]

## 中東欧の声楽作品を聴く

—— 音楽、言語、歴史をつなぐ鑑賞の手引き ——

岡本 佳子

2018年3月29日に開催された「2017年度日本スラヴ学研究会研究発表会」（東京大学本郷キャンパス法文1号館113教室）にて、第IV部としてミニシンポジウム「中東欧の声楽作品を聴く——音楽、言語、歴史をつなぐ鑑賞の手引き」が行われた。本記録に続く3篇の論考は、それぞれの口頭発表内容を踏まえてまとめられたものである。参加者は、発表者が内藤久子氏（鳥取大学教授）、松尾梨沙氏（日本学術振興会特別研究員PD）、岡本佳子（東京大学特任助教）、そしてコメンテーターが阿部賢一氏（東京大学准教授）であった。

イタリアやドイツ、フランスを「主流」とする声楽作品の歴史のなかで、中東欧の歌曲やオペラはどのような位置付けにあるのか。本企画の目的は、19世紀から20世紀のポーランド、チェコ、ハンガリーを中心に、中東欧地域の声楽作品の事例とその研究動向／成果を紹介し、その上で声楽作品における地域性と国民性に関して、音楽、テキストの側面や歴史的経緯など様々な方面へと議論を開くことであった。

中東欧の地域で各国の言語を用いた歌曲やオペラの作曲が本格化するのは18世紀末から19世紀前半であり、以後、20世紀から現代へと至るまで、作曲技法の変遷とともに多様な形を見せている。その間のポーランド分割や二重君主国体制の成立、そして第一次世界大戦後の各国の独立などの歴史を踏まえると、常に西洋音楽として汎ヨーロッパ的な文脈で創作・受容される側面や、いわゆる「国民楽派」として時に国民性を打ち出そうとする一面、そのさらなる反動など、それぞれの作曲者の創作の特徴が見えるように思われる。

なかでも言葉や物語性をもつ声楽作品には音楽はもちろん、言語や歴史的背景など聴くための手がかりが様々な存在するだろう。中東欧地域の音楽には器楽曲も多く知られているなかであえて「声楽」という条件を設けたのは、文学と言語学の研究者が多い本会の会合に相応しいのではないかと判断したためである。

これまで中東欧という地域をうたった音楽関連のシンポジウムはなされてきてはいるが、「声楽」作品に限定したものは極めてまれであり、特定のオペラ作品の解説等などを除けばほとんど初めてだったように思われる。日本ではあまり馴染みがない状況に鑑み、音源や映像はもちろんのこと、発表者による演奏も交えながらの報告など、視聴覚的にも多方面からの刺激を受けるような華やかなミニシンポジウムとなった。

内藤氏による発表『『チェコ国民オペラ』の創造とその理念』は、スメタナの喜歌劇《売られた花嫁》を対象に、「チェコ性」のイメージが地方性を經由しながら正当化され構築されていった経緯を明らかにした。松尾氏による発表「ショパンとヴィトフィツキ」では、ショパンによる生前未出版であった歌曲を対象に、ポーランド語詩のリズムと音楽の付与の分析を通じて、ポーランドの郷土色とともにウクライナ由来の地域性について論じている。岡本の発表「ゴダーイ《ハーリ・ヤーノシュ》舞台版と組曲版の比較」では、歌劇《ハーリ・ヤーノシュ》とその組曲版を比較しながら、20世紀に「再発見」された民謡と19世紀的な表現のハンガリーでの折衷によって国民性を表現している可能性などが指摘された。

続く阿部氏によるコメントと質疑応答、ディスカッションでは様々な意見が交わされたが、ここではいくつか提示された論点を記録しておきたい。一つ目は、音楽という非言語芸術の特徴として「国民性」が必ずしも国家に限定されているものではなく、都会や都市に対する「地方性」や「地域性」（虚構も含めて）に由来しているという観点である。また、舞曲等については文化接触によって融合している可能性があることや、1848年の汎スラヴ会議開催といった民族的な帯同などからの影響も今後視野に入れることができるのではないかと指摘された。

もう一つは、「国民オペラ」「国民音楽」といった概念の定義づけについてである。これらは現代に音楽史で論じられるものと、19世紀の文脈でどのように受容されさらに創作されていたのかは別の問題として扱う必要があるため、さらに大きい枠組みで議論が可能なのではないかということであった。これについては本ミニシンポジウムの中においても、各国が独立していない状態の19世紀を扱っている内藤、松尾の発表と、20世紀、特に戦間期という混乱の時期を扱った岡本による発表について区別するべきであるように思われた。今後も何らかの形で比較分析していく際に歴史的な文脈を扱う上での課題としたい。

以上のような発表や議論を経たことで「中東欧の音楽作品の事例を研究成果を交えながら紹介のうえ、さらに議論を広げる」という目的は達成されたように思われる。最後に、このようなまれな機会をいただいた企画編集委員会、快くご参加いただいた登壇者、そして当日の聴衆の皆様に深く感謝申し上げます。